

【予報の概要】

| 農作物名 | 病 害 虫 名 | 発 生 程 度 | |
|--------------|----------------|---------|-----|
| | | 現 況 | 予 想 |
| 普通期水稻 | いもち病（穂いもち） | — | やや少 |
| | 紋枯病 | 並 | やや多 |
| | 縞葉枯病 | 少 | 少 |
| | トビイロウンカ | やや少 | 並 |
| | コブノメイガ | やや多 | やや多 |
| | 穂吸汁性カメムシ類 | やや少 | やや少 |
| 大豆 | ハスモンヨトウ | 並 | 並 |
| いちご （育苗床） | うどんこ病 | やや少 | やや少 |
| | 炭疽病 | 並 | 並 |
| | ハダニ類（注意報第3号） | 多 | 多 |
| アスパラガス | 斑点性病害（褐斑病、斑点病） | 並 | 並 |
| | アザミウマ類 | やや少 | 並 |
| かんきつ | かいよう病（防除情報第9号） | やや多 | やや多 |
| | 黒点病 | 並 | 並 |
| | ミカンハダニ | やや少 | 並 |
| | チャノキイロアザミウマ | やや少 | 並 |
| びわ | がんしゅ病 | やや多 | やや多 |
| | 灰斑病 | やや少 | やや少 |
| | ナシヒメシンクイ | 少 | やや少 |
| 果樹共通 | カメムシ類 | やや少 | やや少 |
| 茶 | 炭疽病 | やや多 | やや多 |
| | チャノキイロアザミウマ | 並 | やや多 |
| | チャノコカクモンハマキ | 多 | 多 |
| | （注意報第4号） | | |
| | チャノホソガ（注意報第4号） | 多 | 多 |
| | カンザワハダニ | 少 | やや少 |
| | チャノミドリヒメヨコバイ | 並 | やや多 |
| クワシロカイガラムシ | 少 | 少 | |

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

普通期水稻

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.6%（2.7%）、発生圃場率は14.5%（27.2%）であった。

イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、葉いもちの発病株率は0.5%（11.7%）であった。

2. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、発病株率は1.1%（1.0%）、発生圃場率は20.0%（15.2%）であった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は41.0%（17.1%）であった。
- ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本病の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

- (1) 予報内容：発生程度 少
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率1.3%）。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（過去10か年平均 発病株率0.0%）。
- ウ 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.1頭）、発生圃場率は30.9%（48.2%）であった。
- エ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭（0.3頭）、寄生株率は3.0%（22.4%）であった。

4. トビイロウンカ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、株当たり虫数は0.01頭（0.03頭）、発生圃場率は9.1%（20.2%）であった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、株当たり虫数は0.1頭（0.4頭）、寄生株率は8.0%（25.3%）であった。
- ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
- ア 今後の発生予測は別紙図のとおりであるが、本虫の発生は圃場間や同一圃場内でも偏りが大きい。このため、圃場の見回りを徹底し、できるだけ圃場全体の発生状況を把握して、防除を行う。出穂期以降の要防除水準は、株当たり雌成虫数が1頭以上である。
- イ 防除実施後もその後の発生状況に十分注意し、防除効果の確認を行うとともに必要に応じて追加防除を行う。
- ウ 本虫は株元を好んで寄生するので、薬剤散布は株元に薬剤が十分に付着するよう丁寧に行う。
- エ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境（ミツバチや水産動植物等）に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

5. コブノメイガ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 8月前期の巡回調査（55筆）の結果、食害株率は18.1%（3.1%）、発生圃場率は85.5%（33.0%）であった。
- イ 8月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、食害株率は9.0%（26.8%）であった。
- (3) 防除上注意すべき事項
圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

6. 穂吸汁性カメムシ類

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
 (2) 予報の根拠

8月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（17地点）の結果、捕虫網による10回すくい取り当たり虫数は3.1頭（10.8頭）と平年より少なかった（表）。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

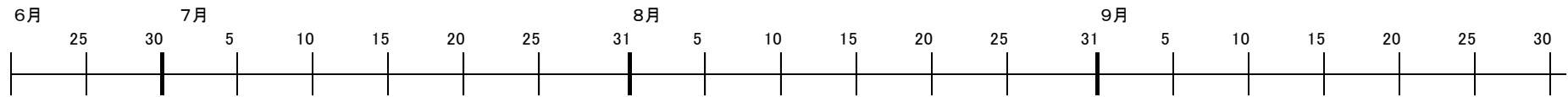
| 種類別 | 10回すくいとり当たり虫数 | | | | | | 発生地点率 | |
|-----------|---------------|-----|-----|-----|------|-----|-------|------|
| | R1 | R2 | R3 | R4 | 平年 | R5 | 平年 | R5 |
| ホソハラカメムシ | 0.6 | 0.6 | 0.5 | 1.3 | 1.4 | 1.2 | 75.9 | 53.8 |
| クモヘカメムシ | 0.2 | 0.3 | 1.0 | 0.5 | 0.7 | 0.4 | 44.5 | 41.2 |
| シラホシカメムシ | 0.4 | 0.1 | 0.1 | 0.1 | 0.5 | 0.2 | 48.0 | 52.9 |
| アカシカスミカメ | 9.5 | 7.6 | 1.0 | 1.2 | 8.0 | 1.2 | 79.8 | 88.2 |
| ミナミアカカメムシ | 0.0 | 0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0 | 3.5 | 0 |
| 計 | 10.8 | 8.6 | 2.5 | 3.1 | 10.8 | 3.1 | 95.7 | 94.1 |

注) 平年はH25～R4年の最大・最小値を除いた平均値

(3) 防除上注意すべき事項

- ア カメムシ類の飛来・増殖源であるイネ科雑草の除去等、圃場環境整備に努める。
 なお、水稻の出穂10日前以降の畦畔等の除草はカメムシ類の圃場内への侵入を助長するので避ける。
- イ 防除時期は穂揃い期とその7～10日後の2回が基本である。
- ウ 水田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布を行うと効果が高い。
- エ 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守するとともに周辺環境（ミツバチや水産動植物等）に配慮し、薬剤の飛散に十分注意する。

(図) トビイロウンカの発生予測図(令和5年)



(飛来日)

7月1日
主飛来

| | | | | | | | | | |
|----|---|--------|----|---|--------|----|---|--------|----|
| 成虫 | 卵 | 第一世代幼虫 | 成虫 | 卵 | 第二世代幼虫 | 成虫 | 卵 | 第三世代幼虫 | 成虫 |
|----|---|--------|----|---|--------|----|---|--------|----|

(飛来日)

7月10日

| | | | | | | | | |
|----|---|--------|----|---|--------|----|---|--------|
| 成虫 | 卵 | 第一世代幼虫 | 成虫 | 卵 | 第二世代幼虫 | 成虫 | 卵 | 第三世代幼虫 |
|----|---|--------|----|---|--------|----|---|--------|

※ 発生予測の気温は諫早市貝津町(農林技術開発センター)のデータを用いた(6/1~8/16実測値、8/17以降は平年値)

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（6筆）の結果、幼虫の寄生株率は1.3%（2.8%）、株当たり虫数は0.1頭（0.1頭）、白変葉発生圃場率は66.7%（44.2%）であった。

イ フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は、平年よりやや少なく推移している（図）。

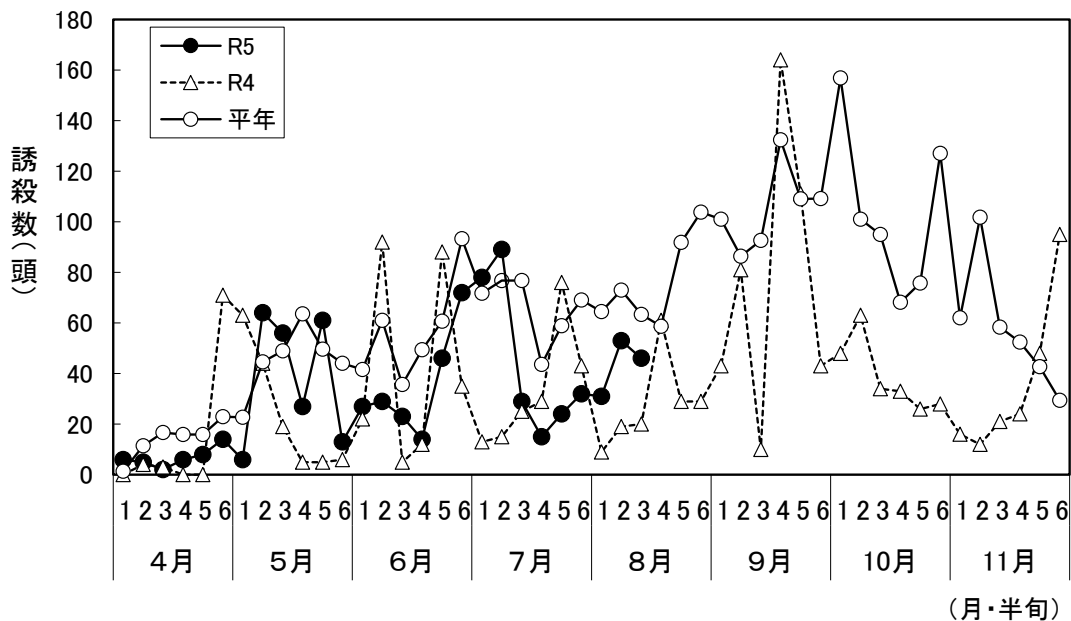


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況（諫早市小船越町）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

いちご（育苗床）

1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（26筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率0.4%）。

(3) 防除上注意すべき事項

本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定植前の薬剤防除を徹底する。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で発病しやすいため留意する。

2. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（26筆）の結果、発病株率は0.1%（0.2%）、発生圃場率は7.7%（8.9%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置せず、適切に処理する。
- イ 長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後は重点的に薬剤散布を行う。
- ウ 本圃での定植後の発病を防ぐため、定植前までの防除および定植前の苗の選別を徹底する。

3. ハダニ類

令和5年8月18日付け**病害虫発生予察注意報第3号**による。

アスパラガス

1. 斑点性病害

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査（9筆）の結果、発病側枝率は0.3%（2.4%）、発生圃場率は33.3%（36.0%）であった。

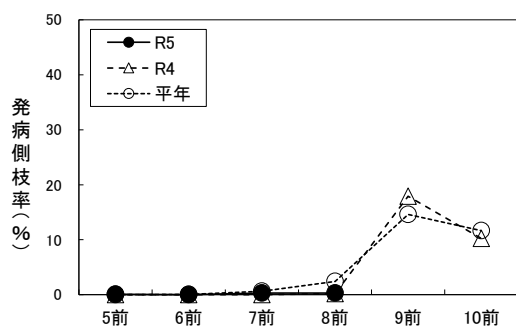


図 斑点性病害 発病側枝率の推移

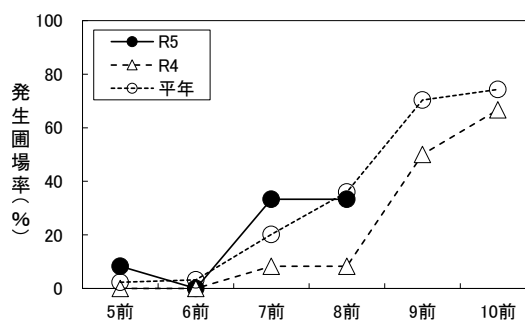


図 斑点性病害 発生圃場率の推移

2. アザミウマ類

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査（9筆）の結果、払い落とし虫数（10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所）は8.7頭（11.2頭）、発生圃場率は44.4%（68.1%）であった。

イ 向こう1か月の気温は高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

- (3) 防除上注意すべき事項

ア 施設内および周辺の雑草は生息・増殖源となるので除去する。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準 P282～283の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤を連用しない。

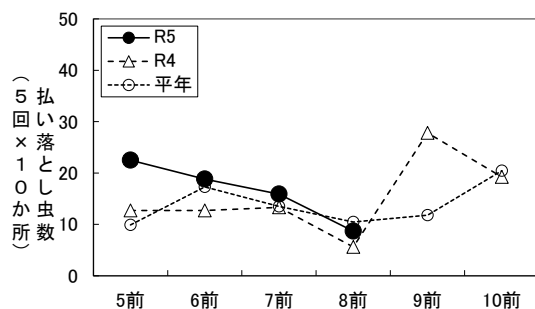


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移
※払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

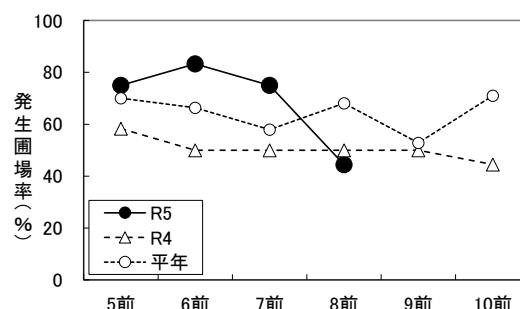


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

かんきつ

1. かいよう病

令和5年8月18日付け**病害虫発生予察防除情報第9号**による。

2. 黒点病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(36筆)の結果、発病果率は3.0%(3.4%)、発生圃場率は13.9%(19.8%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後の気象(降雨)の推移に留意し、防除適期を逸しないよう努める。

※累積降水量による防除間隔の目安は250～300mmである(マンゼブ剤の場合、令和5年長崎県病害虫防除基準参照)。

イ 臨機防除で薬剤を追加散布する場合は、各薬剤の使用回数に注意する。

ウ 枯れ枝が伝染源となるので、管理作業と併せて剪除する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(36筆)の結果、寄生葉率は4.5%(8.8%)、発生圃場率は25.0%(44.1%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 盛夏期を過ぎて気温が低下してくると発生が増加するので、発生初期に防除する。

イ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和5年長崎県病害虫防除基準P386～389およびP394～397の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

ウ 薬剤感受性が低下している場合があるので、効果の高い薬剤を選定する。具体的データについては、病害虫防除所ホームページのかんきつのミカンハダニ薬剤感受性検定結果を参照する。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(36筆)の結果、果梗部の被害果率は0.5%

(1.5%)、発生圃場率は16.7%(22.6%)であった。果頂部の被害は発生を認めなかった(被害果率0.2%、発生圃場率4.5%)。

イ 黄色粘着トラップ(諫早市)において、直近の誘殺量は平年よりやや少ない。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

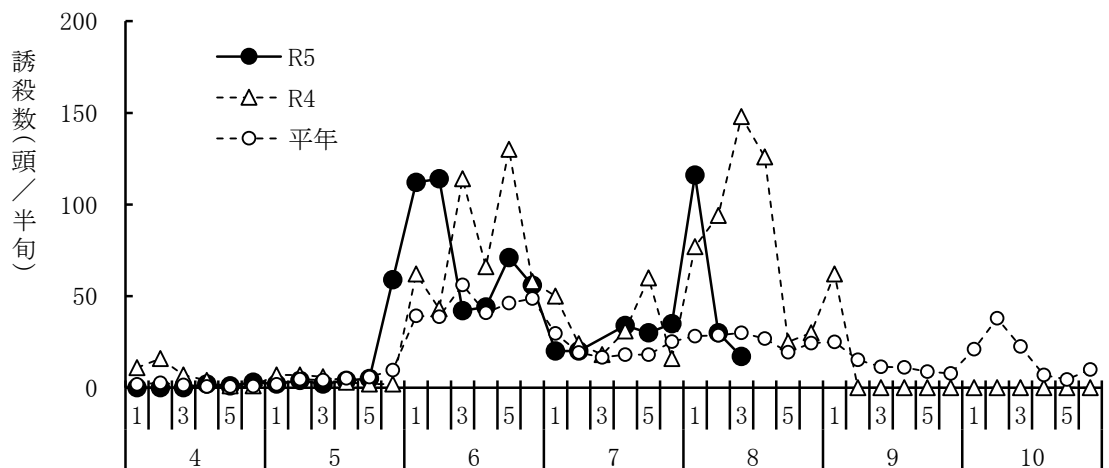


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況
(諫早市小船越町:黄色粘着トラップ)

(月・半旬)

※7月3半旬は強風による粘着板紛失のため欠測

※※8月9、10日は台風接近により欠測

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日

| 地点 | 長崎 | 佐世保 | 口之津 | 平戸 |
|--------|------|------|------|-------|
| 第6世代 | 8/11 | 8/12 | 8/15 | 8/24 |
| 〃 (平年) | 8/20 | 8/21 | 8/21 | 9/6 |
| 〃 (前年) | 8/14 | 8/14 | 8/18 | 8/26 |
| 第7世代 | 8/28 | 8/28 | 9/1 | 9/13 |
| 〃 (平年) | 9/6 | 9/8 | 9/7 | 9/28 |
| 〃 (前年) | 8/31 | 8/30 | 9/5 | 9/15 |
| 第8世代 | 9/15 | 9/16 | 9/20 | 10/8 |
| 〃 (平年) | 9/26 | 9/29 | 9/28 | 10/30 |
| 〃 (前年) | 9/18 | 9/17 | 9/23 | 10/9 |

注1:発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。
なお、積算には2023年8月16日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2:同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。
また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3:表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお、発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は0.7%(0.6%)、発生圃場率は40.0%(17.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は樹体の傷口から感染するため、芽かきやせん定作業時はできるだけ断面

(傷)が小さくなるようハサミを用い、作業後は速やかにペースト剤の塗布を行うなど、断面の癒合を促進する。

イ 感染予防のため、整枝・せん定後や強風を伴う雨が予想される場合には、カスガマイシン・銅水和剤などの散布を行う。

ウ ナシヒメシクイの侵入口は感染経路となり、また病斑部にナシヒメシクイが食入すると感染が助長されるため、本虫に対する防除も併せて行う。

2. 灰斑病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は8.9%(20.9%)、発生圃場率は80.0%(95.0%)であった。

3. ナシヒメシクイ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(寄生枝葉率0.1%、発生圃場率3.8%)。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は平年より少ない(図)。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

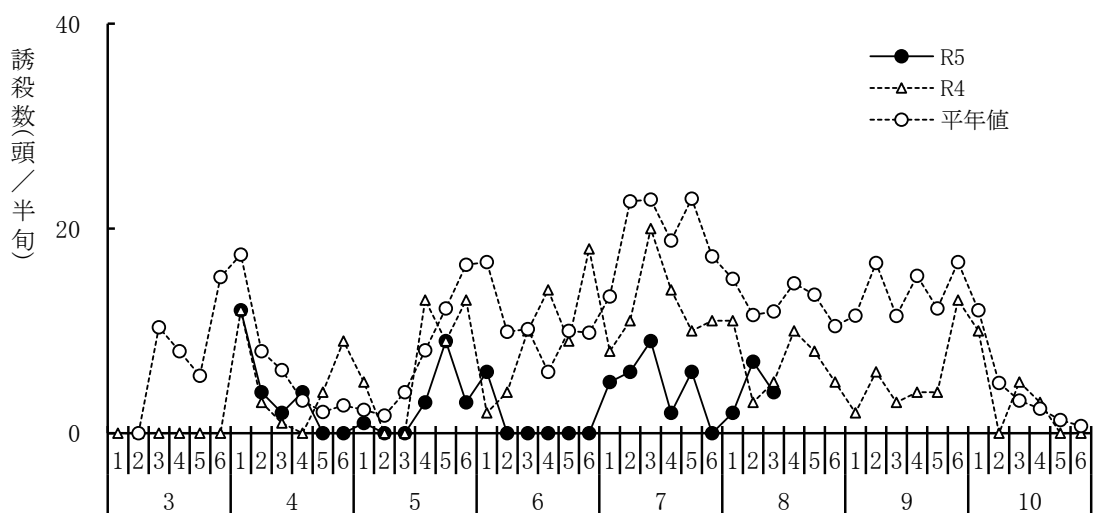


図 ナシヒメシクイの誘殺状況
(諫早市小船越町:フェロモントラップ)

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ(諫早市、西海市、南島原市)の誘殺量は、平年と比べて少なく推移している(図)。

イ 7月下旬に実施したヒノキきゅう果のビーティング調査の結果、1枝当たりの寄生虫数は1.0頭(2.0頭)と平年よりやや少ないものの、県内15地点のヒノキきゅう果の平均着生程度は3.1(2.7)と平年よりやや多いため、新世代成虫の発生は、平年並以上となる場合も考えられる(令和5年8月9日付け**病害虫発生予察技術情報第2号**参照)。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである。高温・乾燥が続く気象では、ヒノキきゅう果の劣化が急速に進み、ヒノキからの離脱が早まる場合がある。

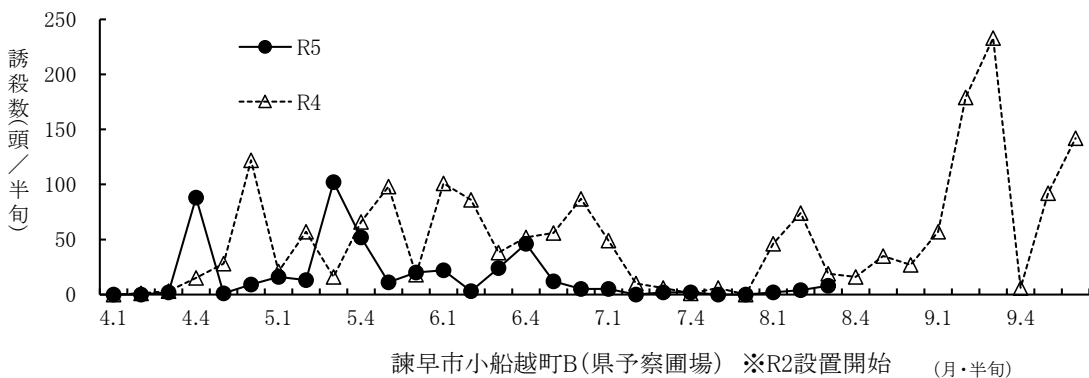
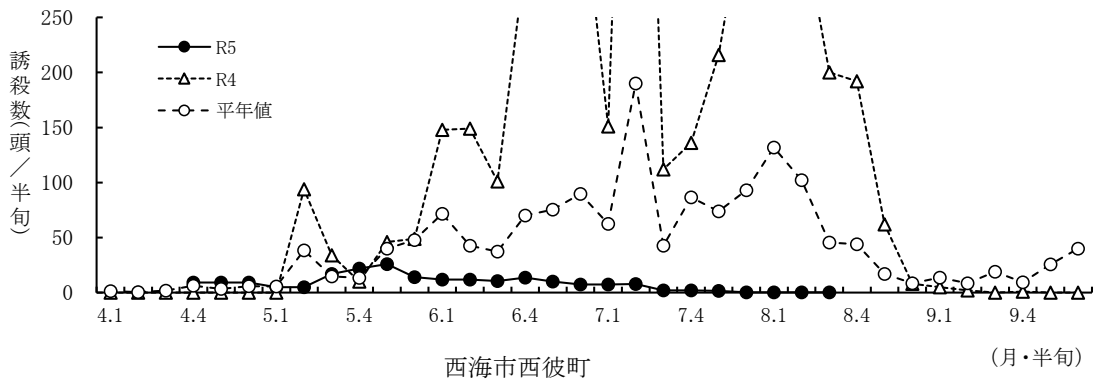
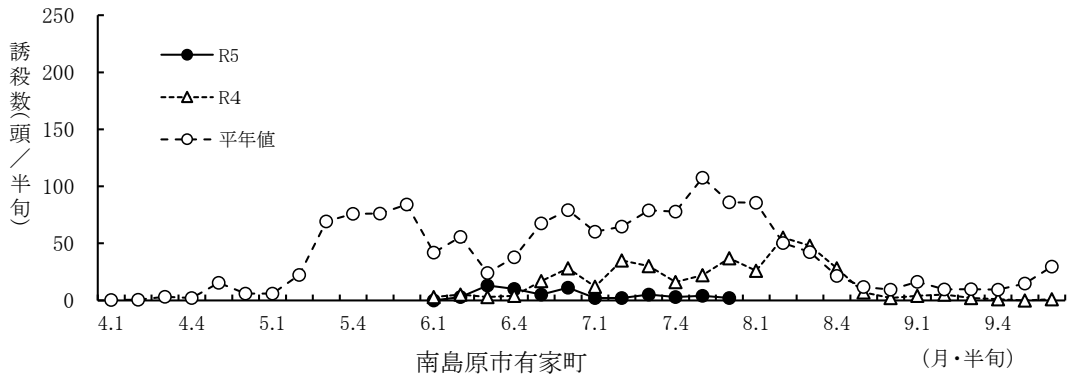
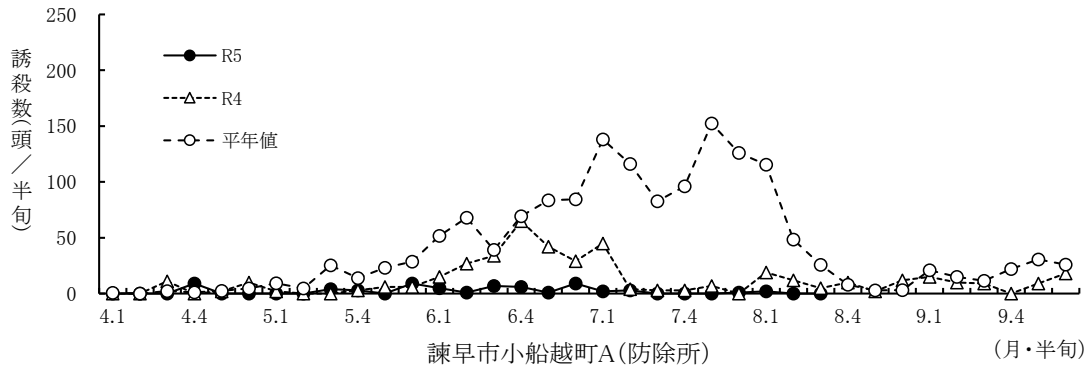


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来時期や飛来数は園によって差があるので、こまめに見回って早期発見に努め、飛来を認めたら早急に防除する。山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいため注意する。
- イ ハウス栽培では、開口部を防虫網（4mm目以下）で被覆し、侵入を防ぐ。また既に被覆済みのハウスでは、防虫網の破損がないか点検・補修する。

- ウ カメムシ類の活動は日没前後から活発になるため、薬剤散布は夕方あるいは早朝に行うのが効果的である。
- エ 合成ピレスロイド系薬剤を連用するとミカンハダニが急増することがあるので注意する。
- オ 特に収穫時期の近い品目は、薬剤散布時期に注意し使用基準を遵守する。また、周辺環境を十分に確認し、ミツバチを含め周辺動植物等への飛散等の影響がないよう十分注意する。

茶

1. 炭疽病

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
8月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡当たり発病葉数は4.0枚（3.1枚）、発生圃場率は83.3%（52.3%）で、一部多発圃場が見られた。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準P426～427の「作用機構による分類（FRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

2. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は30.7頭（29.1頭）、発生圃場率は83.3%（95.3%）であった。
イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準P428～431の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

3. チャノコカクモンハマキ

令和5年8月18日付け**病害虫発生予察注意報第4号**による。

4. チャノホソガ

令和5年8月18日付け**病害虫発生予察注意報第4号**による。

5. カンザワハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率0.9%、発生圃場率19.6%）。
イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準P428～431の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠
ア 8月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は

3.5頭(3.2頭)、発生圃場率は83.3%(53.5%)であった。

イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和5年長崎県病害虫防除基準 P428~431の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

8月前期の巡回調査(12筆)の結果、発生を認めなかった(寄生株率6.2%、発生圃場率34.8%)。

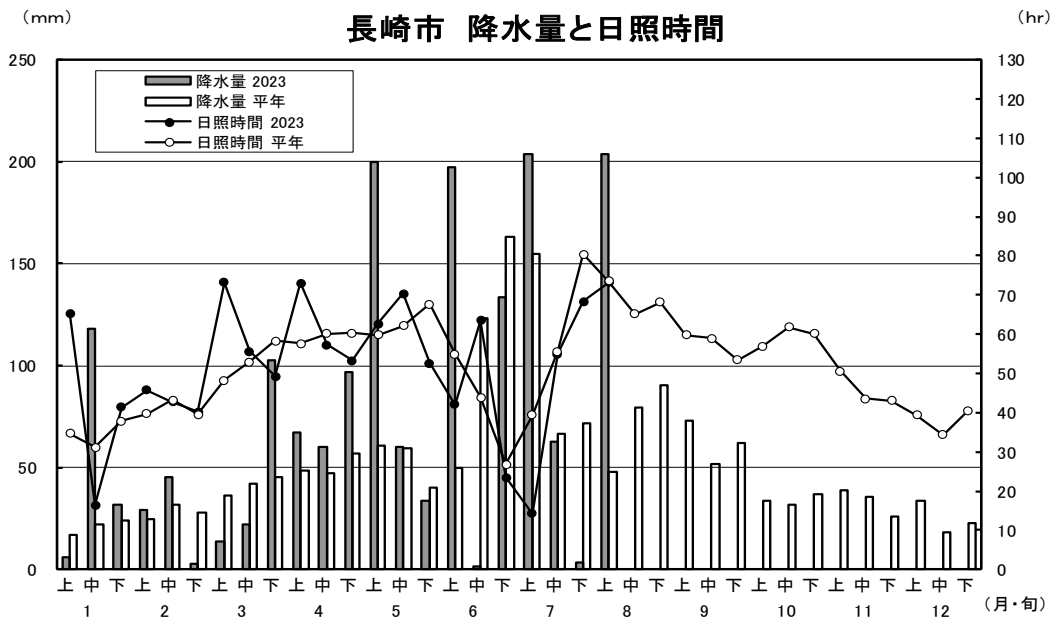
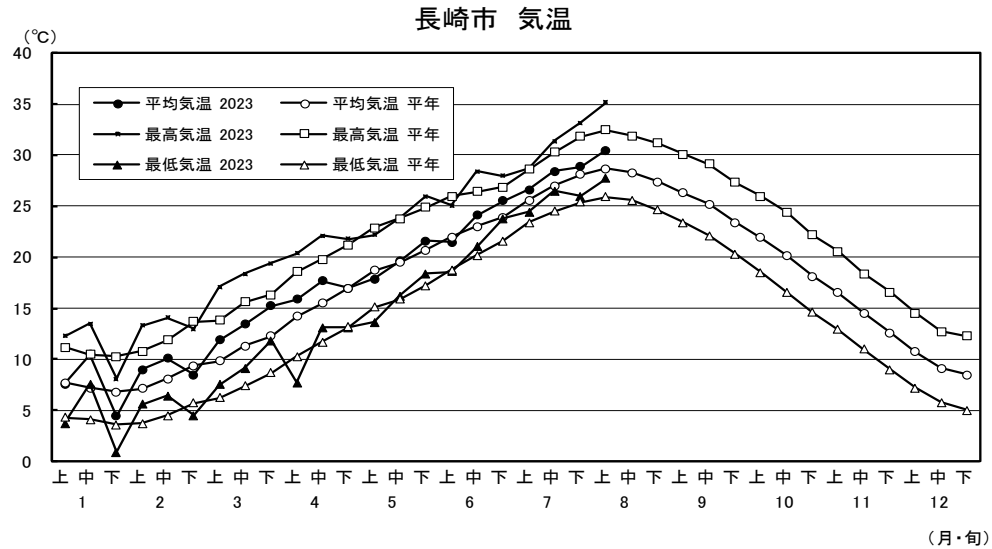
【参考】

(令和5年8月17日発表 1か月予報 福岡管区気象台)

| 要素 | 低い (少ない) | 平年並 | 高い (多い) |
|------|-------------|-----|------------|
| 気温 | 10 | 20 | 70 |
| 降水量 | 30 | 40 | 30 |
| 日照時間 | 30 | 40 | 30 |

※予報対象地域：九州北部地域

令和5年の気象経過(長崎地方気象台)



- 6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。
- 長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス：<http://www.jppn.ne.jp/nagasaki/>
- この情報に関するお問い合わせ
長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室
(長崎県病害虫防除所) TEL：0957-26-0027

